

2014.5.7

調査結果報告

金沢大学人文学類教授 岡田努

このたびは調査にご協力いただきありがとうございました。大変おそくなりましたが、簡単な分析結果についてご報告させていただきます。

調査対象

インターネット調査

回答者 国内各県の4年制大学学生および卒業生

年齢 19歳～25歳（平均20.49歳 標準偏差1.66）

有効回答者数 206名（男女それぞれ103名）

実施時期 2013年7月

紙版質問紙調査

首都圏，近畿，北陸の4年制大学学部学生1から4年生

年齢 18～24歳（平均20.26歳 標準偏差1.32）

有効回答者数 155名（男性47名 女性108名）

実施時期 2013年12月から2014年2月

調査内容

調査は以下のような構成となっております。

1)不安場面項目 40の対人場面について、どれだけ安心できるか伺いました。これは次の「ふれ合い恐怖」と呼ばれる心理特性との関連を調べるためのものです。「公的場面・年長者の前」「情動的に近い他者との場面」「情動的に遠い他者との場面」に分けられます。

2)ふれ合い恐怖的心性 現代の青年に特有とされる新しい対人関係上の不安として『ふれ合い恐怖』と呼ばれるものが注目されています。一般の若者でもこうした不安を感じやすくなっていることがしばしば指摘されています。この程度を測るための項目です。人としてちょうどよい距離が取りにくいと感じるなどの「関係調整不全」と、人と一緒にいることを避けてしまう「対人退却」の2つの要素からなっています。

3)対人恐怖的心性 2)のふれ合い恐怖とは異なり、昔から日本人に多く見られると言われてきた対人恐怖的な傾向を測るものです。集団にとけこめない、気恥ずかしいなど対人状況における自分自身の行動、態度、話し方、振る舞いなどにおける支障を示す「対人状況における行動・態度の諸特徴」、対人場面で他者からどのように見られているかという問題意識である「他者との関係における自己意識」、自分自身に対する自信のなさを示す「内省的自己意識」という要素からなっています。

4)現代の青年の友人関係 現代の若者に特徴的な友人関係のあり方、特に傷つけ合うことを避ける傾向を中心にはかるものです。友だちから傷つけられないよう気をつける「傷つけ

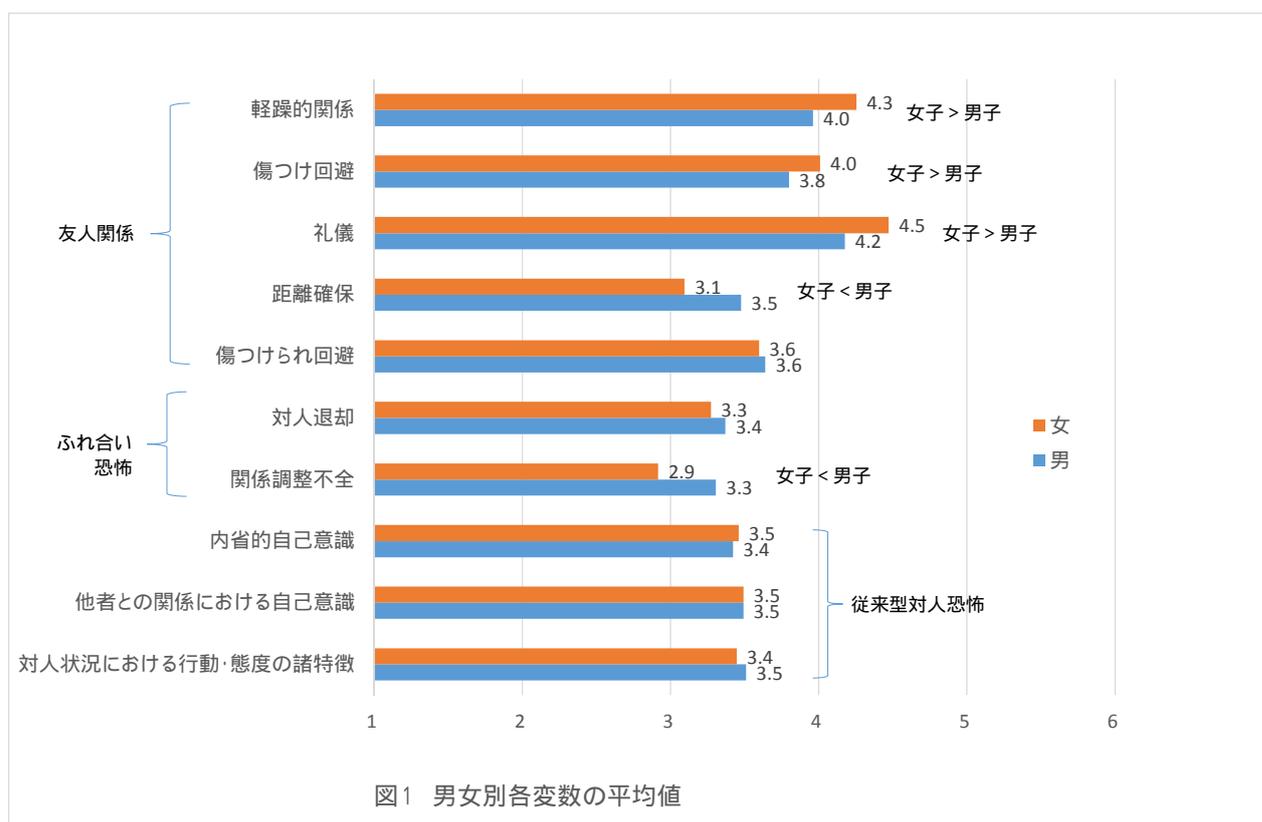
られ回避」,自分をあまりさらけ出さず距離を置いた友人関係を持つとする「距離確保」,謝ったり相手の話を聞くなど礼を失しないように気をつける「礼儀」,相手の気持ちを害さないように気をつける「傷つけ回避」および楽しい関係を維持しようとする「軽躁的關係」について伺いました。

結果

男女間での得点差

図1にそれぞれの変数(調査内容)ごとの男女の得点を示しました。得点が高いほどそれぞれの傾向が高いことを表します。不等号は統計的に差があったものを示します。ここにありますように,友人関係のあり方では,女子は「お互い楽しくなるよう(軽躁的關係),相手を傷つけないよう配慮(傷つけ回避)しながら,礼儀を護るようになる。一方男子は相手に踏み込まないように距離を取る(距離確保)傾向が高いことが分かりました。

またふれ合い恐怖の一つである「関係調整不全」で男子が高いことから,男子は距離を取りながら,その距離感がうまく測れず戸惑うことが多いものと考えられます。



各変数の関連

ふれ合い恐怖の心性が高い人は、情動的に遠い他者や公的な場面ではさほど問題を感じず、むしろ関係の深まりに直面する「情動的に近い他者との場面」で安心感が下がると考えられます。このことを確認してみました。表1にその結果を示します。この値は「相関係数」といって、0に近いほど無関係、-1に近いほど「一方が高ければ、他方が低い」という関係性が強いことを示します。

表1 場面尺度とふれ合い恐怖尺度間の相関

ふれ合い恐怖尺度/ 不安場面尺度	公的場面・年長者 の前	情動的に近い他者 との場面	情動的に遠い他者 との場面
関係調整不全	0.102	-0.361	-0.089
対人退却	-0.334	-0.078	-0.323

(「関係調整不全」「対人退却」それぞれ他方の尺度得点を統制変数とした偏相関係数)

ここに見られるように、「公的場面・年長者の前」「情動的に遠い他者との場面」では関係調整不全との関連性は小さく、反対に対人退却との関連性が見られました。反対に「情動的に近い他者との場面」では関係調整不全との間でのみ関連性が見られました。

このことから、情動的に近い他者との間でのふれ合い状況が、まずふれ合い恐怖を高めこれが「関係調整不全」との関係に表れていると考えら、「関係調整不全」がより「ふれ合い恐怖」の本質に近いものと考えられます。しかし関係調整不全は「公的場面・年長者の前」との間では関連性が見られませんでした。臨床的な指摘から考えれば、こうした場面では「安心感が高い」(+の相関)になるはずなので、新たな発見と言えます。こうした場面では、相手との距離を縮め親密になることを要しないため心理的距離を調整する必要がないために、無相関であったとも考えられます。

今後一般的対人恐怖傾向や友人関係との関連についても分析を進めたいと思います。なお本結果は日本社会心理学会第55回大会にて『「ふれ合い恐怖の心性」の対人関係について(2)インターネット調査との比較』として研究発表を行う予定となっております。

お問い合わせ先

金沢大学人文学類 岡田努

E-mail:tokada@staff.kanazawa-u.ac.jp